

くらえとんが男



NISHIZAKA RAITO



星空は、青年の一番の親友だった。



辛い事があった時も、嬉しい事があった時も

星が出る夜は、青年はいつもこの丘で星達と語り合っていた。



今日も空には満天の星。

でも今日は、なんだかいつもと様子が違う・・・。

空に吸いこまれるような、不思議な感覚があった。



彼の体は、星達に導かれるように舞い上がり

どこまでも飛べるようになっていた。



その日を境に、星の出る晩青年は
空を飛ぶ練習をするようになった。



もっと高く、もっと速く、どこまでも遠くへ。



星達は青年ともっと近くで語り合いたかったし

青年もそれを望んだ。



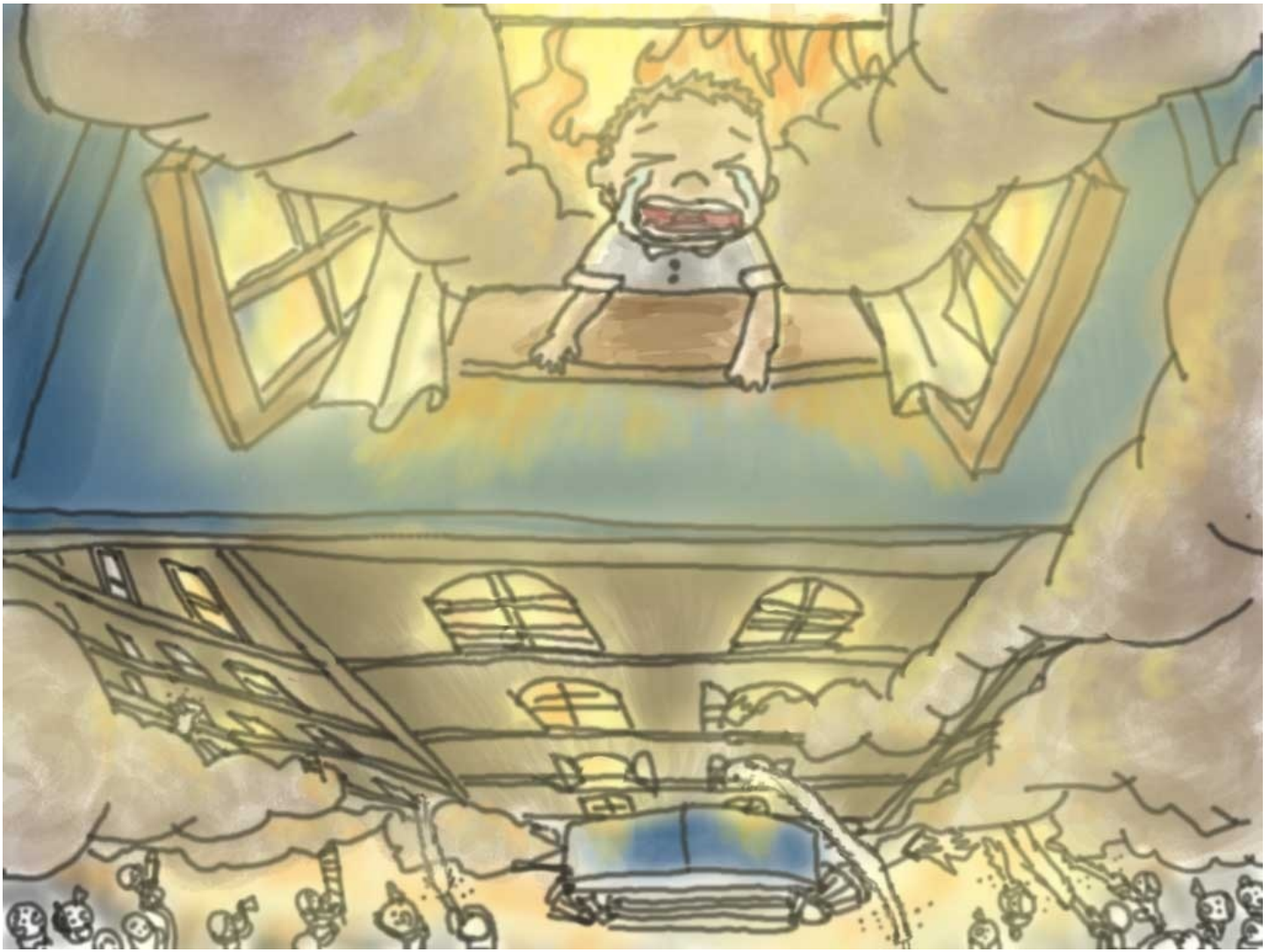
彼はこの事を他の誰にも言う事はなかった。

平穏を愛していたのだ。



しかしある晩、事件は起きた。

大きな炎に包まれたアパート。



そこには、まだ小さな男の子が必死に助けを求めている。



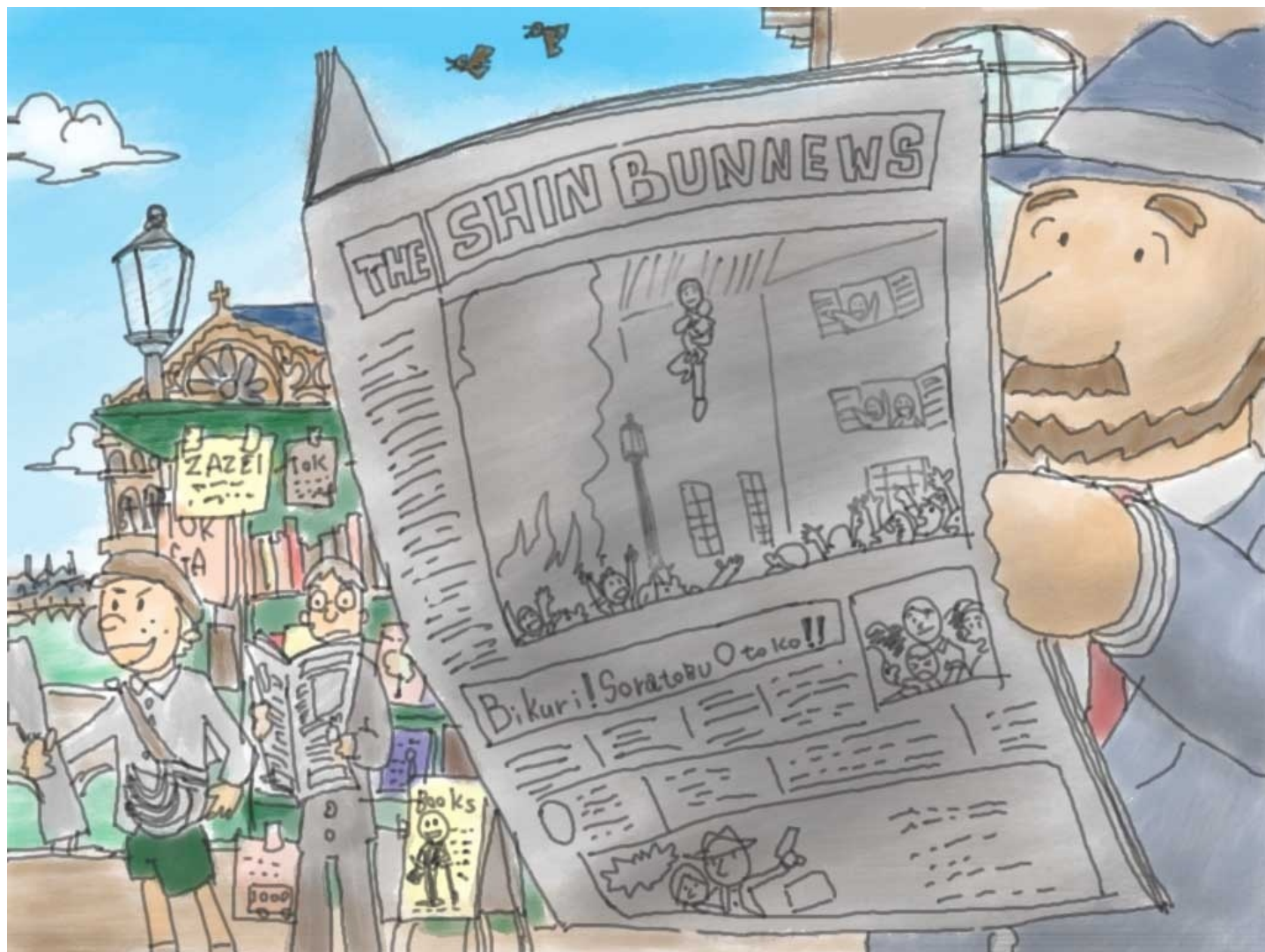
誰もが手をこまねいて、その様子を見ている事しかできなかった。

どうにかしてあの子供を助けてやれないか。

皆がそう思っていた。







そのニュースは世界中を駆け巡り

青年は国中の人に知られるようになった。



青年の愛していた平穏な日々は、遠い過去のものになった。



それから騒々しい毎日。



そしてある日、令状を持った制服の男が尋ねて来た。

それは『勝手に飛ぶ事を禁ずる。もし守れないのなら危険分子として逮捕する』

という内容のものだった。



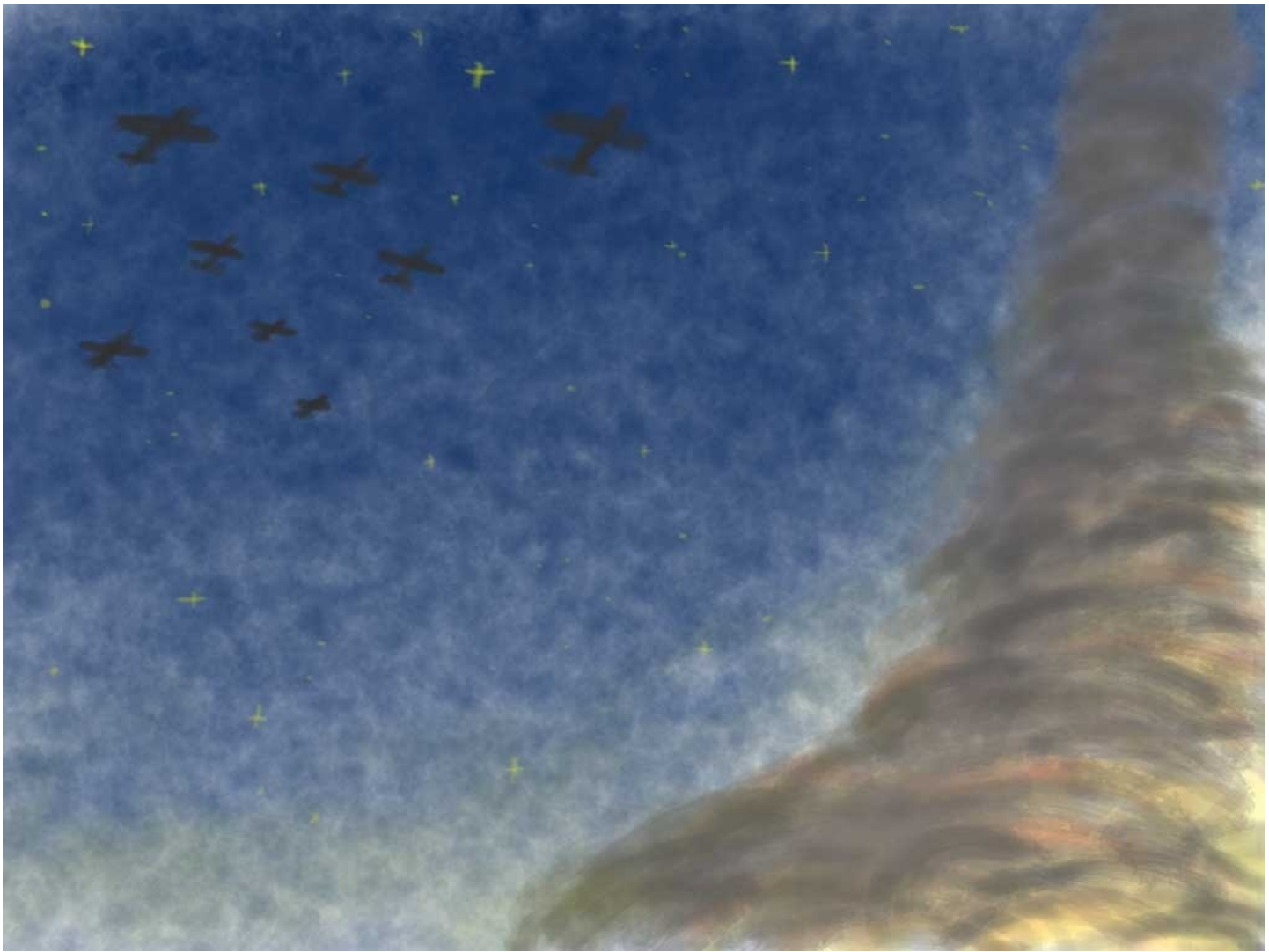
力ある者の強引な理由で、青年の见えない翼はへし折られた。

星や月はそんな青年をただ悼む事しかできなかった。



やがて国中が戦争の色で染まり

民衆は青年の事を忘れていった。

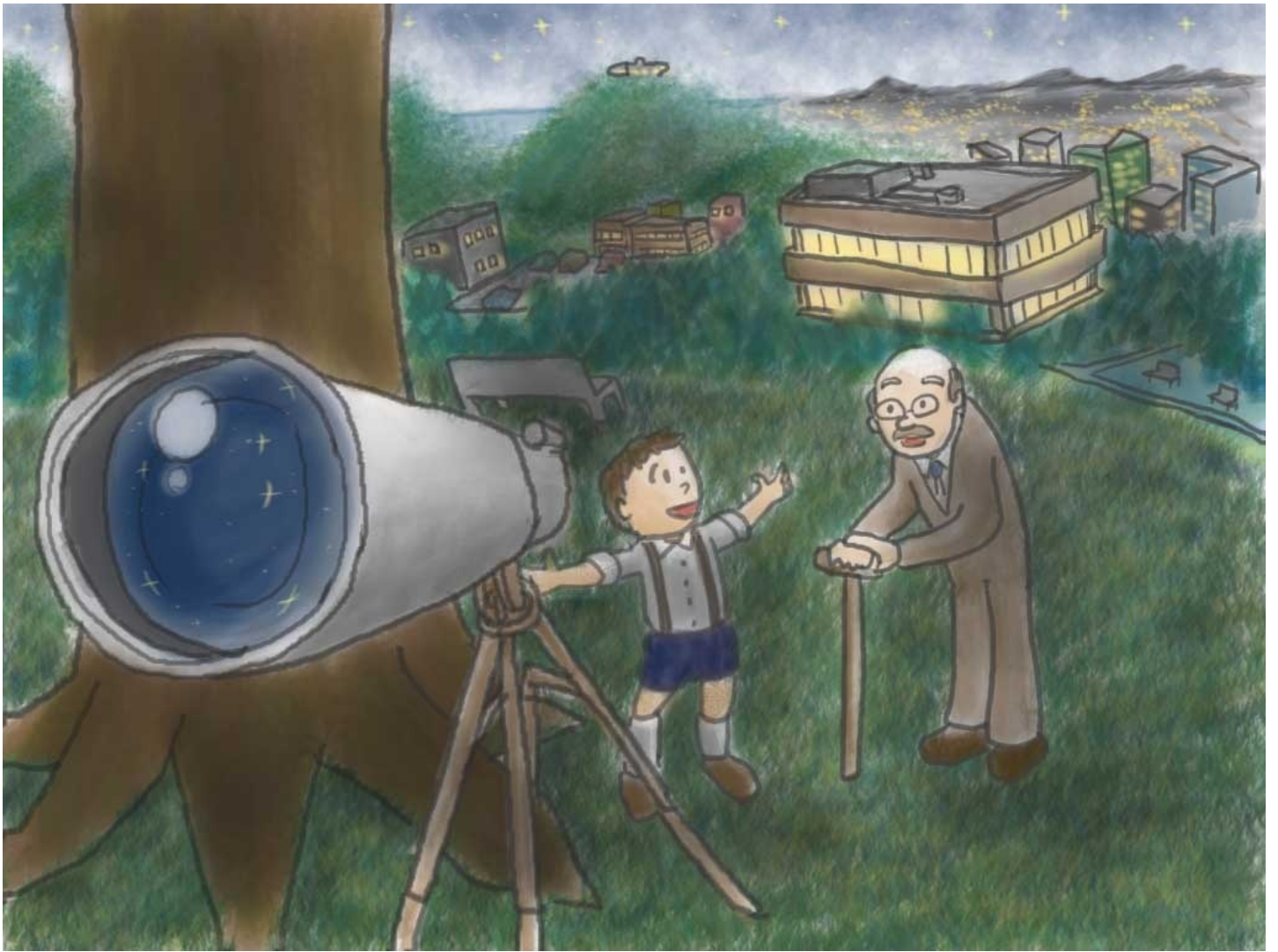




それから何十年もの月日が流れた。

かつての青年の行方を知る者はいなかった。

青年の丘は、今も変わらずに星達と共にたたずんでいた。



ある老人が、心配そうに少年に話しかけた。

「こんな夜に、家族が心配しなしかい？」

「大丈夫、僕が毎晩ここで星を見ている事を家族はみんな知っているから」



老人は優しく微笑みながら静かに語りだした。

「私が君くらいの頃、空を飛ぶ男に命を救ってもらった事がある・・・。」

「空を飛ぶ男？」

「ああ。ちょうどその日もこんなふうに星の綺麗な晩だった」



それからというもの、少年は毎晩空を飛ぶ男の事を考えるようになった。



そして少年も、星達に導かれ

さえぎるもののない大空へと吸い込まれてゆくのだった。



これから彼はどんな運命を辿るのか

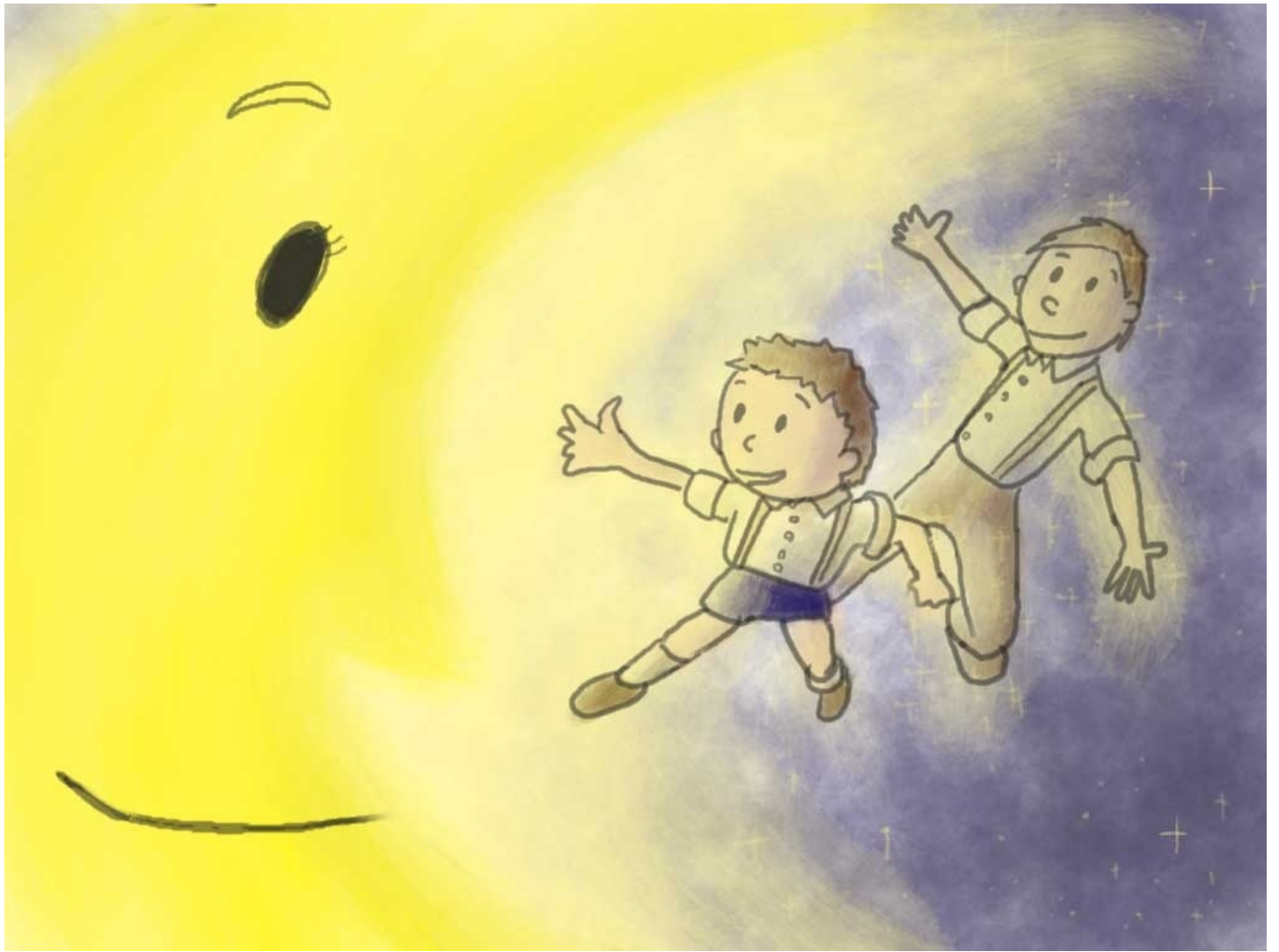
それは誰にもわからなかった。

星や月さえも。



星達と彼らの友情を断つ権利など誰にもない。

老人はそう思った。



時代の風は吹くだろう。

穏やかな風や、あるいは嵐の中を

少年は飛んでゆく。

